東京の教育

復刊第二十八号　東京都教師会発行

（事務局）横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三一〇

第六十二回日本教師会教育研究大会報告

会長　佐藤健二

大会開会式

八月四日に標題の研究大会が、今年は三重県四日市市の地場産業振興センター「じばさん」を会場にして開催された。主管は三重県教師会。当会は長く活動中止状態にあったが、皇學館大学教授渡邊毅氏が日本教師会会長となったことで、渡邊氏を中心にその若き教え子の皆さんの協力もあり、三重県教師会として再出発、今回は主管として開催の運びとなった。まずは渡邊会長をはじめ、開催準備や当日の運営に尽力してくださった三重県教師会の皆さんに深く感謝申し上げる。

研究主題は「地域と共に創る教育―郷土を教え、郷土を愛し、地域創生をはかる―」。大会は一日のみで、午前十時に開会式が行われ、開会の辞を本会副会長・大阪教師会会長の中曽邦輔氏が、会長挨拶・歓迎挨拶を渡邊会長が行い、主題の郷土愛を深め、地方再生につなげる教育の意義を強調された。

記念講演は、国立大学法人東京海洋大学名誉教授和泉充氏による「地域連携とこれからの人材育成」と題するものであった。人材育成ということで、先生が指導された三重県の鳥羽商船高等専門学校での取組みを、スライドを用いお話をされた。特に岩手大学や北里大学と共同して、支援人材「水産海洋イノベーションオフィサー」の育成として、三陸沿岸の「磯やけ域」の藻場回復に向けて、ウニ資源の水中ロボットによる捕獲と有効利用の研究開発が熱心に行われている様子が、映像を通して説明された。ロボット捕獲により、中身の未発達のウニをどのように熟成させるか、非常に興味深い取組みがなされているのである。普段ほとんど目にすることのない世界なので、そのように地域と連携しながら、海洋人材育成の最前線の様子を知ることが出来、大変有りがたい講演であった。

その後昼食休憩を挟んで、午後一時から実践発表。最初は、小学校の部として、津市立美杉小学校教諭の溝口哲志氏による「ＩＣＴ機器を活用した地域学習の実践」。従来の壁新聞や模造紙の発表では、調べたことが学級内で完結し、他学年や保護者に伝わらないということから、積極的にＩＣ機器を用いて、美杉町についての町内地区を超えた知識や魅力をスライドにして、それに音声を吹き込み、何度も修正を加えながらプレゼン資料を作成した。そのデータをデジタルマップ上に添付し、その地区名をクリックすると、子供達が作成したスライドが音声と共に自動再生されるという仕組みである。これにより、このデジタルマップは学年を超えて共有され、また保護者も子供の持っている端末iPadでそれを見ることができる。子供と親と地域とが一体となって、郷土への理解と愛情が深まるという素晴らしい実践報告であった。

中学の部は、岐阜県飛騨市立古川中学校校長中村裕幸氏による「地域と学校協働による「未来の創り手」の育成―古川中マイプロ（地域貢献）の取組を通じて―」という発表であった。飛騨市教育委員会では、「未来の創り手」である子供たちの資質・能力を社会総がかりで育成するプロジェクト「飛騨市学園構想」を実施し、目指す「創り手像」と「地域像」を学校・地域・家庭とが共有しているという。表題にある「古川中マイプロ」というのは古川中学独自のマイプロジェクトであり、そのねらいは①生徒自身の興味関心、得意や好きを生かす、②地域の方々に「ありがとう」と言われる、③この活動を通して生徒がどんな地域人になりたいかを発信する、というところにある。

令和四年度に始まったマイプロは、地域と学校とが協働して、一年生は「防災」で地域を深く知る、二年生は「職業」で地域と深く関わる、三年生は「貢献」で地域に深く貢献するという目標を設定、具体的には、三年生の貢献では、地域の公園・空き地に「手作りベンチ」を作成し、どこに設置するかは市の観光課や市観光協会と協議し、ベンチの作成は市内の業者の協力を得て四十六台のベンチを作成した。

このように「マイプロ」により地域と学校とをつなげる教育をされているということで、校長としての中村先生の自信をもった力強い語り口からも、古川中学校の「マイプロ」教育が立派な成果を挙げていることが伝わってきた。

高校の部は、三重県立相可（おうか）高等学校教諭の新谷和昭氏による「本校におけるSBPの取り組み」という実践発表であった。SBPとはソーシャル・ビジネス・プロジェクトのことで、地域の課題をビジネスの手法で解決していこうという取り組みである。この高校には生産経済科というコースが設置されていて、そこでは「園芸福祉」という新たな理念により、「花や野菜を育ててみんなで幸せになろう」という目標を明確にした。この活動にはお金が掛かるので、最初に生徒達が取り組んだのはNPO法人の設立ということであった。先生は一切表に出ず、役員もすべて生徒だけで申請し、試行錯誤の上認定された。そのNPO法人の名称が「植える美ing」という。それを聞いて私はすぐにWHOが提唱したWell-beingという新しい「幸福感」を表す言葉を思い出した。日本では教師会でもお世話になっている高橋史朗先生が熱心にその理念の普及に取り組んでいられる。この「植える美ing」という命名は、漢字英語混じりの実によくできた表現で、生徒が考えついたのか、いや先生の発案か、とても感心した。相可高校生産経済科の生徒達は、園芸福祉により地域と連携して、幸せにいきいきと生きることの出来る地域にするために、その幸福実現のための実践をしているのである。

その活動は実にユニークで、その一つにコスメの開発がある。大手の企業などと協力しながら今まで十三種類のコスメを開発し、一億円以上の売り上げを得て、経済産業大臣賞やモンドセレクションなど様々な賞を受賞しているという。また伊勢茶の普及ではJAXAの国際宇宙ステーション「きぼう」の実験棟で育てられた宇宙大豆と伊勢茶を組み合わせて製品化、またバイオマスプラントの設置にはクラウドファンディングを使って四百万円を集め、設置に成功。その他、地域の一人暮らしのお年寄りに寄り添い、元気づける活動、名づけて「ロンリーゴーストバスターズ」、これまた見事なネーミング。バラの剪定や栽培の作業の後は、生徒とお年寄りとが一緒にお茶を飲んだり、お菓子を食べたりするそうだ。孫のような生徒達と一緒にお茶の飲む幸せそうなお年寄りの姿が目に浮かぶ。まさにWell-being「植える美ing」の実践であり、深い感銘を受けた。

実践発表の後は、少し休憩を入れて、予定時間より三十分ほど遅れて十六時頃から総会を行った。東京都教師会の佐藤が議長に選出され、予定されていた第一号議案　令和五年度事業報告、第二号議案　令和五年度会計報告、第三号議案　令和六年度事業計画（案）、第四号議案　令和六年度予算（案）及び令和六年度役員、第五号議案　その他として「日本教師会六十年略史」について等、すべて原案通りに承認された。第三号議案の中で、次期大会についてということで、来年は兵庫県教師会主管で現会長の平山弘氏が学長を務める阪南大学を会場として行うことが承認された。

閉会式では、平山先生が次期開催地代表として挨拶をされ、副会長の後藤章嘉氏による力強い閉会の挨拶があり、「日本教師会の歌」を参加者一同で高らかに歌い、滞りなく第六十二回教育研究大会を終えることができた。

忘るべからざる話

藤井雅和

駅名の怪

東海道線（山手線京浜東北線）の港区港南に新駅が出来て、もう四年あまりになる。そして、ある事実が次第に忘れられてゆくの

で、ちよつとしるしておく。

平成三十年六月、設置に先立ち新駅名公募が行はれた。六万四千五十二件の応募があり、一万三千二百二十八種の名が集まつたといふ。一位が「高輪」で、八千三百九十八票。続いて「芝浦」「芝浜」「新品川」「泉岳寺」などであつたさうだ。しかし結果として公表された駅名は「高輪ゲートウエイ」。これは百三十位で、一位の二百分の一以下の三十六票。当然駅名反対撤回署名が始まり四万七千九百三十筆が集まつた。しかし会社側は「駅名は変へるつもりはない」と命名を強行してしまつた。現況を見ても、この駅名は公募前に既に内部決定してゐたことがうかがはれる。

営利企業が自社の施設にどのやうな名を付けてもよいといふ考へもあるかも知れないが、鉄道事業は公共交通と言はれるやうに、駅名は地名と同じく公共物であるといふ認識が缺けてゐる。営利を優先した、奇異を衒ふ話題作りとも取られかねない珍妙な命名は暴挙であつたといへよう。公募は所謂「出来レース」であつた可能性が高い。

結論が決まつてゐて、それに向けていろいろな工作を行ひ、時には無辜の民を巻き込んでいかにも正当に結果が出たかに細工をする、こうした事例が世に溢れてゐるやうに思ふ。公募をし、ヒアリングを行ひ、アンケート調査と称して民意を導く。選挙前などによく行はれる「世論調査」は「輿論操作」であることが多い。「内閣の支持率」などはマスコミ機関の自社の主張を補強するために、質問事項で巧みに誘導する。

教科書採択の現場にもこれがあるさうだ。展示会や公聴会は単なる「アリバイ作り」に過ぎないと言はれる。

その最も顕著なものが、所謂「東京裁判」であつたことは論を待たないであらう。

（会員）

戦前の中学国語の教科書を読む（二十二）

〔次の文章は、三矢重松編纂　島野幸次　折口信夫補訂『新制中等新國文』「巻一」（現在の中一前期相当）（昭和十二年版）所収のものである。漢字、送り仮名は原文通り。読み仮名は、適宜新たに加へた。〕

身邊涼味

相馬御風

越後では眞夏でも眞白な雪をゐながら眺め樂しむことが出來る。長い冬の間に降り積つた雪は、雪室（ゆきむろ）とか雪小屋とか呼び慣はされてゐる貯藏處に集められて、いつまでも冬のまゝの白さを失はずに貯へられる。それらの雪の大部分は春夏秋を通じて生魚の貯藏に用ゐられる。土地で獲れた魚類を遠方へ移出するにも、やはり此の眞白な雪が何よりのたよりになつてゐる。先づ箱の中に一ぱい眞白な雪が詰められる。そしてその中に獲れたばかりの生々した魚が埋められる。それはいかにも美しくいかにも旨さうに見える。とりわけ鯛のやうな美しい色をした魚の雪漬にされたのは、見るから氣持のよいものである。

眞夏になると、此の眞白な雪の塊の驚くべく大きなのを、私たち風情（ふぜい）でもさほど高い價を拂はずに部屋の中に溶けるまゝにして置くことが出來る。それによつて室内の空氣をどれほど冷すことが出來るかは別として、單にそれを眺めてゐるだけにでも、他では得難い涼味がある。私達の幼い頃までは此の「圍ひ雪」を食べることが許されてゐたものである。そして其の頃は夏中街上に雪賣の呼び聲が絶えなかつた。

「雪や氷、雪や。」

子供達は競うてかうした呼び聲を張りあげて町中を歩いた。雪小屋へ行つて雪を買つて來る。そしてそれを小さな箱や籠に入れて賣り歩く。買ひ手がある毎に小さな鋸で眞白な雪の塊を、呼び賣の豆腐屋が豆腐を切るやうに、小さく幾つかに切つてやる。それは子供達にとつては一種の仕事であり、商賣の練習であつたと同時に、此の上なく愉快な銷夏法でもあるやうに考へられてゐた。

雪は氷――殊に人造食用氷――に比べると、その冷たさは柔かであり、齒ざはりも頗（すこぶ）る快い。子供の頃夏の暑い日盛りに眞白な雪の塊を手につかんで、ざく／＼音を立てながら食べた快さは今でも忘れ難い。併し衞生上の取締が嚴重になつてから「圍ひ雪」を食用

に供ずることが固く禁じられて、今日ではその代りに、私達の地方にすらも、夏になると何處からか人造氷が盛んに移入されるやうになつた。そしてあの懐かしい、「雪や氷、雪や。」といふ子供達の呼び聲も、夏の街上に聞くことが出來なくなつた。

それにも拘らず雪を貯藏して置く場處、卽ち雪小屋は次々に數を增してゆく。それは魚類の移出が年々盛んになつて行くからである。

夏の夜の涼しさは、何といつても海際が第一である。日が暮れかゝる頃から避暑客などの來てゐない此のあたりの砂濱でさへ、さすがに賑やかになる。暗くなると、人々はあちらに一團こちらに一團といふ風に集つて焚火をする。そしてその焚火で茶を煮る。眞裸になつた老若男女がその焚火の周圍に集つて茶を飮み、話をする。多く漁師の妻女達や老人達や子供達である。沖には烏賊釣船の漁火が幾百となく竝んでゐる。海上の漁火、海濱の焚火、いづれにも原始的な味ひがある。

焚火の周圍に集つた子供達の間から、時々こんな問が母親に向つて發せられたりする。

「沖の舟の火、みんなで幾つあるだらう。」

さうかと思ふと、

「あの中のどれがうちの父つあ達の火だらうなあ。」といふやうな情味の籠つた幼い疑問まで持ち出される。

暗い海の上の空には、仄白い銀河が、夜の更けるにつれて鮮かさを增す。涼しい風が水のやうに流れる。おだやかな低い波の音が單調なうちに限りない複雜を藏してゐるやうに聞える。時には廣い砂濱のどこかで、冴えた聲の追分節が謠はれたりする。冷たい砂の上に仰向けになつて、私達は夜の更けるのも知らずに、星空の神祕に魂を奪はれてゐる事がしばしばである。身內の冷えすぎたのに驚いて立ち上がる頃には、磯の焚火もいつの間にか消えてしまつてゐる。そして波の音が妙に淋しさをそゝる。沖の漁火だけは依然として燃え續けてゐるが、それさへも、

沖べなるいさりをたちは夜をふかみ
さまざまのこと思ひてあるらむ

かうしたことを思はせずにゐられないほどに、何となく淋しさうに見えるのである。

—（第二の自然）—

（原註）

相馬御風　名は昌治。明治十六年新潟縣に生る。早稻田大學文科出身。文學者。

追分節　地方民謠の一。（例）おしよろ高島及びもないが、せめて歌棄磯やまで。

いさりを　（漁夫）

（編註）

「追分節」は中山道と北国街道の分岐点である信濃追分の宿駅で唄われた馬子唄が起源であり、諸方に伝播し、変形していった。拍子にはめず、長く伸ばし、哀調を帯びた旋律で唄う。原註は北海道の「江差追分」の歌詞。「忍路・高島・歌棄・磯谷」はそれぞれ北海道内の地名。

□短信寸評□

明年は「昭和百年」に当たる。その後平成令和と続き、昭和は遠くなつてしまつたと感じることも多い。

昭和に思ひを馳せ、昭和の偉業を偲び、特に戦後の日本のあり方を顧みる重要な機会の年となるであらう。　（ふ）

日本教師会教育研究大会

令和七年度第六十三回大会は兵庫県の主管で開催される予定です。

お願い

一、会費納入

年額　二千円

口座　「みずほ銀行」港北ニュータウン支店

店番号　７４３　普通預金　１３３０１５０

名義　佐藤健二

二、原稿募集

「東京の教育」への会員の皆様のご投稿をお待ちしています。

三千字程度まで。仮名遣いは統一して下さい。写真や図版も対応します。

送り先は題字下にあります。また、メールの送り先は次の通りです。

事務局アドレス（佐藤）

komasato@juno.ocn.ne.jp